

ノストラダムス『予言集』初期版本に関する 文献学的諸問題の検討

鈴木 大輔[†]

16世紀フランスの人文主義者ノストラダムスの『予言集』には、全巻を通じた信頼できる校訂版はまだ存在しない。本稿ではその確立に寄与すべく、初版である1555年版、増補版である1557年版を中心に、生前に刊行された版について解明されている点を整理しつつ、残された論点が何かを明らかにする。1555年版は従来、1555Aと1555Vの2系統に分類されてきたが、19世紀以来何度か出現してきた第3の伝本に関する情報を整理すると、それが2つの系統の中間に位置する過渡的な版である可能性を指摘できる。また、1555Vはノストラダムスが直接手を入れた可能性のある改訂を含むが、生前の他の版には引き継がれることはなかった。1557年版は1557Uと1557Bの2系統があり、その関係性について諸説あるが、1557Bを海賊版と見做すのが妥当であろうことが校異から判断できる。他方で、最古の完全版である死後2年目の1568年版には、1557Bの異文も流入していることが確認できる。1561年ごろにパリで出版された版は海賊版だが、失われた版についての痕跡を含む可能性がある。それらの検討を踏まえると、次の機会に要請される課題は、1558年版が実在したのかどうか、言い換えれば、それらに依拠したと主張する17・18世紀の版と、1568年版のいずれを第8巻以降の底本として重視すべきかについての更なる検証となるだろう。

An examination of philological problems in the early editions of *Les Prophéties* of Nostradamus

Daisuke Suzuki

There is no reliable and complete edition of the *Prophecies* of Nostradamus. It has not even been determined whether *Centuries VIII – X* of the *Prophecies* are authentic. As a first step in examining this question, this paper deals mainly with early editions. Two copies of the first edition are surviving at least, one in the Médiathèque Pierre-Amalric of Albi (1555A) and another in the Österreichische Nationalbibliothek, Vienna (1555V). 1555V has been regarded as a revision of 1555A and the same as the third copy (once in Rigaux's private library). But considering Barest's transcription of the third, we should presume that the third copy is a transitional version from 1555A to 1555V. Whatever happens, it was 1555A that served as the editorial basis for the 1557 editions, and the revisions in 1555V were not carried over in his lifetime. Since 1557B edition (November 3, 1557) had more errors than 1557U edition (September 6, 1557), 1557B is considered a pirate version. However, the posthumous 1568 edition, the oldest surviving complete edition, inherited some inaccurate variants of 1557B for some reason. On the next occasion, we must further consider which quatrains of the *Centuries* are authentic, comprehending Nostradamus' picture of the world better.

1. はじめに

『ミシェル・ノストラダムス師の予言集』(*Les Prophéties de M. Michel Nostradamus*). 以下、『予言集』と略記)は、16世紀フランスの人文主義者ミシェル・ド・ノートルダム、通称ノストラダムス(Michel de Nostredame, dit Nostradamus, 1503 - 1566)の主著の一つである。

『予言集』については、近年、ノストラダムスの他の著作である『ヒエログリフ聖刻文字註解集』、『至妙の製法集』と合わせた

三部作と捉え、そこに通底する意図を汲み取ろうとする興味深い研究も立ち現れている(Huchon 2021) [1]。反面、『予言集』を論じる際にどのようなテキストに依拠すべきかという点について、広く合意されているとは言い難い。

その結果、一般には全10巻とされる一方で、死後の版でしか確認できない第8巻以降には偽作の疑いも存在する。他方、信頼できる校訂版とされるピエール・ブランダムールの版(Nostradamus 1996)は初版に収録された第4巻53番までしか対象としておらず、全7巻か全10巻かを問わず、全巻を通じた信頼すべき校訂版は(いくらかの試み

[†] 博士後期課程在籍中(人文学プログラム)

があるとはいえ）確立されているとは言い難い。そもそも、ブランダムールの校訂にしても、高く評価しうるものだが、アンナ・カールステットのように、その方法に強く否定的な見解すらある（Carlstedt 2005）。そこで本稿では、ノストラダムスの生前に刊行されていた『予言集』の版について過去に明らかになっている点と不十分な点を整理し、校訂に向けて検討されるべき課題を明らかにしたい。

2. 1555年マセ・ボノム版

『予言集』の初版は、1555年にリヨンの出版業者マセ・ボノム（Macé Bonhomme）によって刊行された。

2.1 ボノム版の構成

現在伝わる『予言集』は、2つの序文（第1巻に先行する「息子セザールへの手紙」、第8巻に先行する「国王アンリ2世への手紙」）、1行10音綴の四行詩100篇から成る「詩百篇」（*Centurie*）各巻で構成されているが、それは段階的な増補によるものである。

『予言集』の初版に収録されていたのは、まだ1歳半にもなっていない長男セザールに宛てた序文（以下、第一序文）と、詩百篇第4巻53番までの353篇の四行詩のみであった。

「*Centurie*」は、19世紀のエミール・リトレの辞書にもノストラダムスと結びつけた語義が併記されていたほどに、ノストラダムス作品の通称として知られることになった。だが、四行詩100篇を1巻として「詩百篇」と名付ける構成は、ノストラダムスが最初ではない。ボノムは、1552年にギヨーム・ド・ラ・ペリエール（Guillaume de La Perrière, 1499-1565?）の詩集『四界の考察』（*Les Considérations des quatre mondes*）を出版しており、これがまさに四行詩100篇からなる詩百篇4巻で構成されていた。それは表題の通り、神界、天界などの4つの世界を詩で表現するものであって、『予言集』とは主題が異なるが、形式的にはこれに従ったと指摘されている（高田・伊藤1999: 331-332）。

しかし、なぜこれに従ったのかは明らかではない。そもそも「詩百篇」という呼び方をしたこと自体、ノストラダムス自身の判断ではなく、ボノムの編集の結果という推測すらある（Guinard 2008: 18）。実際、ノストラダムスは第一序文の中では、自分の作品を指して「予言集の百篇ごとの占星術的四行詩群」（*chacun cent quatrains astronomiques de prophéties*）といった表現を使う一方、「詩百篇」という呼び方を一度もしていない。

ミレイユ・ユションは、ノストラダムスがナヴァル王家に取り入る意図を持っていたことの一環として、同家とも繋がりがあった詩人ラ・ペリエールのスタイルを模倣したと推測している（Huchon 2021: Ch.4）。この見解は興味深いものではあるが、ならばなぜ第4巻を未完の状態で刊行したのか等の疑問も湧く。様式を模倣しようとしたのな

ら、全4巻を100篇ずつ揃えるべきではなかったのだろうか。

初版に収録された詩篇が353篇という中途半端な数であることについて、有力な仮説はない。たとえば、ロジェ・プレヴォは、ノストラダムスの重要な参照元の一つである占星術師リシャール・ルーサ（Richard Roussat）の著作『諸時代の状態と変転の書』（1550年）で重視された354年4か月の周期に引き付けて、354の直前で止めた可能性を指摘している（Prévost 1999: 120-121, 245）。また、これについては生まれて「1年3か月余り」だった長男に捧げた序文と「353」篇を合計することで、354年4か月とほぼ一致するという捉え方もある [2]。これらは興味深い一致ではあるものの、広く受け入れられているとは言い難い。

初版の詩篇の数や、『四界の考察』と違って400篇を揃えなかったことに意味があるのかどうかについては、なおも検討の余地があるように思われる。

2.2 アルビとウィーンの伝本

『予言集』初版を刊行したマセ・ボノムは、1535年から1569年までリヨンで活動した出版業者で、1541年と1542年だけヴィエンヌで活動した（Mellot et al. 2019: 186）。また、アヴィニオンにも足がかりを築き、1552年には弟バルテルミーに印刷工房を開かせている（宮下2000: 137-138）。ボノム兄弟は1557年までアヴィニオンで活動した。

ボノムは、1555年4月30日にリヨンのセネシャル裁判所（*sénéchaussée*）から、『予言集』初版に関する2年間の特認を得ている。初版の最後のページには「1555年5月4日刷了」とある。

『予言集』の初版は長らく失われていたが、1980年代にアルビ市立図書館とウィーンのオーストリア国立図書館の蔵書が相次いで確認された（前者を1555A、後者を1555Vとする。以下、略号については本稿の「7. 付表」を参照のこと）。しかし、それらの原文には異同が見られる。それはplaieとplayeのような些細な綴り方の違いもあれば、garde（歩哨）とgarce（若い女）のような別の意味の語になっている場合もあり、そうした差異は28篇54箇所に見られる [3]。その比較の結果から、1555Aが先に刊行され、その誤りを訂正して刷られたのが1555Vと見なされている。

その訂正には、ノストラダムス自身が関与した可能性も指摘されている。ノストラダムスは1553年に暦書の出版をいい加減にした業者に苦情を述べて、別の業者に替えた記録があり、自著の正確な印刷に拘っていたことが分かるからである。ブランダムールはその話に加えて、修正のほとんどが第2巻までに集中していることから、刷本についてノストラダムスが取り急ぎ確認できた範囲のみを反映させた結果ではないかとした（Nostradamus 1996: XXI-XXII）。

ノストラダムス『予言集』初期版本に関する
文献学的諸問題の検討

パトリス・ギナールも、1555Vにはノストラダムス自身
が加えた修正が反映されているという立場である。ギナールは、6月8日にボノム兄弟が南仏で土地の取引をしていた記録があることなどを踏まえ、リヨンから南仏に赴く前に、急いで刊行したのだろうとした(Guinard 2006/2020)。こうした推論は異文の比較結果(表1)とも矛盾しないものであり、1555Aよりも1555Vの方がノストラダムスの意志を反映しているという推論は、妥当なものと認められる。

2.3 第3の伝本

1555年版には、1555Aとも1555Vとも異なる、19世紀から21世紀に断続的に記録されてきた伝本がある。

19世紀にジャム神父 (l'abbé James) が所蔵し、エクトール・リゴー (Hector Rigaux, 1841 - 1930) に引き継がれた伝本と、20世紀半ばに書肆ジュール・チエポー (Jules Thiébaud) 夫妻が所蔵していた伝本がそれである。それらは、別々の伝本として扱われてきたが、現在では同一であったことが明らかになっている。そして、それらを紹介した論文やカタログに掲載されていた数ページ分の写真を踏まえ、花模様などの意匠から、内容的には1555Vと同じ版と見なされてきた (Scognamillo 2010 : 13-20 ; Guinard 2006/2020)。だが、そうした通説には、疑問を呈しておきたい。

疑問の根拠は、ウジェーヌ・バレスト (Eugène Bareste) の『ノストラダムス』(1840年)にある。同書には、ジャム神父の蔵書を借り受ける形で、1555年版の原文が忠実に転記されていた。通説が正しいのであれば、その原文(1840EB)は1555Vに一致していなければならないが、その内容は表1の通り、1555Aとほぼ一致する。

もちろん、バレストの転記にも誤りはありうるだろうし、誤植を手直した例もあるかもしれない。だが、例えば、第1巻86番のverta, vaincuについてバレストは、底本ではそうだがverra, vaincueに修正したと注記している(ゆえに表1ではverta, vaincuとした)。このような細かい注記の付け方からすれば、少なくとも初版の四行詩については、相応に誠実な転記が行われたものと考えてよいだろう。

以上から、バレストが利用した版は、花模様などの版面が1555Vに一致する一方、原文の特色は1555Aにかなり近いことがわかる。ここから、1555Aと1555Vの間で微調整しながら刷られた中間的な版だったという推測が成り立つ。

その場合、1555Vがノストラダムス自身の意志を最も正確に反映していると考えられるが、生前の増補版である1557Uは、1555年版のうちで最も誤植の多い1555Aを参照していたことが、表1から読み取れる。厳格な著者であればこのようなことは起こらないはずである。だが、実際にはラプレーやフロバールなど、最終的な版にそれまでの改訂版の変更点が反映されているとは限らない事例が指摘されている。その原因としては、後年の改訂において、直近の改訂版ではなく、(改訂済みの版と誤認したりして)

より前の版本を底本として改訂作業を行った可能性などが想定されている(宮下1997: II-Ch.5)。ノストラダムスもまた、増補に際して既出の詩篇の底本とすべき版として、(改訂済の刷本と誤認するなど)1555Aをデュ・ロースに提供してしまったのかもしれない。いずれにせよ、1555Vの修正に本人の意思が投影されていたのだとすれば、それが現存する生前最後の正規版である1557Uに引き継がれなかった事実は、そのみを底本とした場合に、かえって正確さを損ねる可能性があることを示唆している。

表1 初期版本の比較 (1)

	1555A	1555V	1840EB	1557U
1-86	verta	verra	verta	verra
	vaincu	vaincue	vaincu	vaincue
1-90	monstres	monstre	monstres	monstres
1-92	clameé	clamée	clamée	clamée
2-1	De par	Et par	De par	De par
2-4	vile	ville	vile	ville
2-19	venus	veneus	venus	venus
2-20	monaque	monarque	monarque	monarque
2-21	sel	tel	sel	sél
2-22	lisle	l'isle	lisle	lisle
2-25	garde	garce	garde	garde
	outrage	outragée	outrage	outrage
2-42	d'vun	d'vn	d'vn	d'vn
2-44	pousée	posée	pousée	pousée
	cymbres	cymbes	cymbres	cymbres
2-45	procrée	procréé	procrée	procrée
	recrée	recréé	recrée	recrée
4-38	Bizant dn	Bizantin	Bizant du	Bizant du
	assault	assaut	assault	assault

なお、1555Vの異文が全く引き継がれなかったわけではない。たとえば、管見の範囲では、1589PVには同じ時期の版に比べて1555年版の特色を引き継ぐ異文が多く、1555Vと一致する異文をいくつも含んでいる(表2参照)。無論この種の一致は、1555Aを参照しつつも、その誤植を直そうとした結果、たまたま1555Vに一致したものもあるだろう。そのため、安易に1555Vを参照したとまでは断言できないものの、留意されて然るべき点である[4]。

また、表1・2には掲載していないが、この点については、1627Maの存在も指摘しておきたい。1555A/Vと1557Uとで食い違い、1557Uの系統が後の版に引き継がれたときに、1627Maで1555A/Vの異文が復活していることがある。たとえば、第1巻79番の« & Agine », 第2巻61番の« Mars », 第3巻80番の« deschassé », « conseiller », 第3巻87番の« laide », « Grogne »などでそうになっている。その中でも、第2巻25番の« garce »や第2巻44番の«

cymbes » は、1555Vのみに見られる異文である。1627Maは従来ほとんど特筆されることはなかった [5]。1627Maは誤植の多い版だけに、過剰な期待は禁物だが、1555V(ないしそれと1555Aとの中間的な版)を参照していた可能性のある、数少ない版と捉えうることは指摘しておきたい。

なお、1644Huなど、後続のリヨンの版にも同様の特色は見られるが、異文の変化から見て1627Ma等を引き写しただけだろうから、特筆すべきものとは考えられない。

表2 初期版本の比較 (2)

	1555V	1557B	1568X	1589PV
1-5	sans faire	faire	faire	sans faire
1-25	cycle	siecle	siecle	cycle
	veux	veutz	ventz	vieux
1-58	Foussan	Fossen	Fossen	Foussan
1-79	Lectore	lestore	Lestore	lectore
1-86*	vaincue	vaincu	vaincu	vaincue
2-1*	Et	De	De	Et
2-19*	veneus	venus	venus	veneux
2-22	d'Eurotte	d'Europe	d'Europe	d'Eurotte
2-25*	garce	garde	garde	grace
	outragée	oultrage	oultrage	outragee
2-48	chief	chef	chief	chefs
2-88	Le nom	Au nom	Le nom	Au nom
2-89	Du iou	Vn iour	Vn iour	Vn iour
2-91	feulon	feu on	feu lon	feu on
4-38*	Bizantin	Bizant. du	Bizant du	bizantin

(*をつけた詩は1555Aと1555Vで一致しない異文。それについては表1もあわせて確認のこと)

3. 1557年アントワヌ・デュ・ローヌ版

現存する中で2番目の版は、1557年にリヨンの出版業者アントワヌ・デュ・ローヌ (Antoine du Rosne) によって刊行された。デュ・ローヌは1545年から1562年頃に活動していたリヨンの出版業者である (Morisse 2004 : 28)。

これに先行して1556年にリヨンのシクスト・ドニーズ (Sixte Denyse) が刊行したという記録はあるものの、そもそもこのような名の出版業者は確認されておらず、詳細は不明である。実在したとしても、初版の特認の期間中であることから、初版と同じ範囲の詩篇しか収録されていなかったはずだと指摘されている (Guinard 2008 : 22-24) [6]。

3.1 デュ・ローヌ版の構成

デュ・ローヌ版には、ポノム版と異なり、様々な相違点を持つ2つの版が残る。「1557年9月6日刷了」と記載されている版 (1557U) と、一回り小さい版で「11月3日刷

了」と記載されている版 (1557B) である [7]。

1557Uは1996年にユトレヒト大学図書館に所蔵されていることが確認された版で、それ以前には伝聞自体が存在しなかった。第一序文に続き、第1巻から第7巻まで収録されているが、第6巻はフランス語詩99篇と番号のないラテン語詩1篇からなり、第7巻は42番までしかない。

1557Uには題名に「上記の著者により新たに加えられた未刊だった三百篇を含む」とあるのに対し、1557Bは「未刊だった三百篇を含む」しかない。収録詩篇にはほとんど違いがないものの、1557Bは第6巻のラテン語詩を欠き、第7巻は40番までしかない。しかも、1557Bには異文が多く、他の版に比べてもかなり特殊な異文を含む。

副題の「三百篇」は概数であって、1557Uでの追加詩篇は289篇、1557Bでのそれは286篇である。ただし、増補版での追加が289 (286) 篇だったことや、その結果の総詩篇数が642 (639) 篇になったことに意味があるのかに関する説得的な仮説は、今のところ誰も提示できていない。

初版の詩篇数が、前述の通り、仮に354年4か月の周期を念頭に置いたものであるのならば、これもその類なのだろうか。ノストラダムスが重視した周期には、ほかに土星が10度公転する期間 (約300年)、木星と土星の合が三角宮 (黄道十二宮を火、地、風、水の組に四分する) の一組を巡る周期 (約240年) と全ての三角宮を一巡する周期 (約240年×4=約960年) などがある。

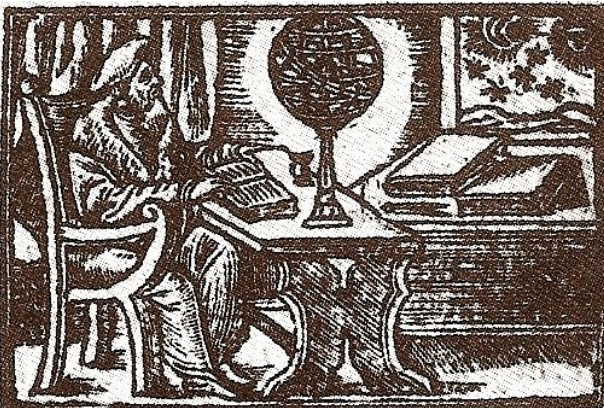
プレヴォは1557年に増補された第5巻1番から第7巻40番までの240篇が土星と木星の合の周期240年に対応すると見なした (Prévost 1999 : 121)。だが、1557Bしか知られていなかった時点ならともかく、第7巻42番まで収められた1557Uが確認されている現在では、7巻を40番で区切る意味はないし、そもそも1557年に増補されたうち、第4巻の後半を無視しているのもご都合主義の感を拭えない。

そのような細部に疑問の生じる数合わせでよいのならば、たとえば、増補された「289」篇に、長女マドレーヌ (増補版刊行時点で6歳くらい)、長男セザール (3歳8か月)、次男シャルル (1歳くらい) の年齢の数を足すことで、土星の10回の公転周期と一致する「300」をおおよそ導ける [8]。ただ、この種の推論はよほどの論拠がなければ、数合わせの域を出ないだろう。

3.2 1557Uと1557Bの関係

1557Bは標題紙の版面が1555Aや1555Uと比べて鏡写しになっており、その描き方も粗雑な印象を受ける (下図)。そのため、1557Uよりも一回り小さい版に粗雑にコピーし、そのサイズで入りきらないものは副題であれ、詩篇であれ、遠慮なく割愛してしまったと考えるのが最もシンプルな理解に思われる [9]。他方で、特徴的な関係性の仮説を唱えた論者たちもいるので、それを確認しておきたい。

ノストラダムス『予言集』初期版本に関する
文献学的諸問題の検討



【図】1555A/V・1557Uの版画(上)と1557B(下)の版画[10]

まず、ジェラルド・モリスは、1557Bが1557年1月の大市に向けて前年の11月3日に刊行されたものであって、1557年9月6日に先行する版であったと推測した(Morisse 2004)。これは標題紙に「1557」とある一方、末尾には「11月3日刷了」とだけあって年が書かれていないことに注目した説である。これに対して、当時まだ通用していた旧方式の暦法(復活祭の頃を年始とする)では、1557年1月の大市の時期は「1556年1月」となるため、ギナールは標題紙に1557年と明記されていることとは整合しないとして、モリスの説を疑問視した(Guinard 2008: 29)。

確かに、後掲の表3にみられる第2巻43番や同46番の異文などからして、1557Bが1557Uに先行したとは考えられない。43番の異文は1555Aではtremulenteとなっていたものが、1557Uでrが脱落しt emulenteと誤って印刷され、1557Bでtが削られてemulenteとなったものであろう。また、46番の異文は、1555Aでtroubleとなっていたものが、1557Uでtrocleになり、1557Bでtrocheになったと考えられる。46番の異文の場合、16世紀にはoとouが交代可能であったことから、troubleをtrobleと綴ろうとしたが、trocleと誤植したものと思われる(当時はアルファベット順に隣接した文字を取り違える誤植は珍しくなかった)。古語辞典の類にはtrocheはあるがtrocleは見当たらない(Godefroy; Huguet)。そのため、trocleという意味の不明瞭な綴りに直面した1557Bの印刷工などがtrocheという綴りに改変したと考えても違和感はないが、逆にtrouble→troche→trocleという改変を想定するのはかなり

不自然な印象を受ける。これらの事例では1555A→1557U→1557Bの順で変化していったと考える方が、推論に無理がない。

表3 初期版本の比較(3)

詩番号	1557U	1557B	1568X	1588Rf
1-25	veutx	veutz	ventz	veux
1-42	or du	osdu	os du	or du
2-1	terroirs	terroines	terrois	terroirs
2-43	t emulente	emulente	tremulente	tremulente
2-46	trocle	troche	troche	trocle
2-81	L'Vrne	Vrna	L'vrne	L'vne
2-89	Du iour	Vn iour	Vn iour	Du iour
3-2	dourra	pourra	dourra	donrra
4-7	chet	chef	cher	cher
4-68	hister	hilter	hister	Hister
4-77	chasse	chassé	chasse	chasses
4-92	la classe	sa classe	sa classe	sa classe
5-32	vaner	varier	vaner	vaner
5-34	Gyronde	Gyrande	Gyronde	Gyron de
5-45	Aenobarb.	Aenobarbe	Aenodarb.	Enobard
5-58	laqueduct	l'archeduc	laqueduct	la queduct
5-90	l'Sparte	Sparte	Sparte	l'Esparte
5-99	Aquilleye	Aquilloye	Aquilleye	Afinilleye

他方で、1557Uよりも1557Bのほうを後と見なしつつ、海賊版ではなくデュ・ロース自身が刊行したと見る説もある。たとえば、ミレイユ・ユジョンは、デュ・ロース自身が翌年向けの暦と一緒に販売するため、慌てて再版したと捉えた(Huchon2021:154)。粗雑な版の理由を、販売する期日という経済的理由に求めるのは合理的ではある。ただし、デュ・ロースが、誤植の非常に多い1557Bの刊行者なのかという点に疑問がある。暦の正確な印刷を巡ってノストラダムスが揉めたことは先述したが、その際に彼が暦の印刷先として委託したと伝えられる業者アントワヌ・デュ・ロワイエ(Antoine du Royer)は、デュ・ロースの誤伝であったと考えられており(Morisse 2004; Guinard 2008)、正確な印刷への拘りを知っていたはずだからである。

前述の標題紙の版画も疑問である。デュ・ロースはノストラダムスが手掛けた翻訳書『ガレノスの釈義』を1557年と1558年に刊行したが、それらの版画は1557Uと同じだからである。1558年にその版画を使用できている以上、紛失や破損はありえない。ならば何故、わざわざ粗雑な版画を作り直したりしたのだろうか。ユジョンの言うように急いで出版したのだとしたら、不自然な印象がぬぐえない。

さて、モリスの説を批判したギナールは、9月6日と11月3日の間が58日間であり、第7巻が42篇しかない(100篇には58篇足りない)ことに対応すると主張した。彼は

当初、その仮説に基づき、デュ・ローヌ自身が1557Bを刊行したと見なしていた (Guinard 2008)。しかし、後に仮説を修正し、11月3日にデュ・ローヌ自身が刊行した版 (現存しない仮定上の版) を、より後の時期に模倣した海賊版こそが、現存する1557Bなのだとした (Guinard 2006/2020)。

ギナールの仮説は「58日」が中心にあり、それをノストラダムス本人の意図としたため、1557Bを海賊版と見なした結果、その元になった版を仮定しないといけなくなっている。だが、第7巻が42篇しかなかった理由や、その欠落を再版の日付で表現するという迂遠なことをしなければならぬ理由を、説得的に示せていない。今のところ、1557Bの底本になった『本物の11月3日版』が他にあると考えるだけの論拠はないと思われるが、いずれにせよ、ひとまず1557Bは海賊版とみてよいのではないだろうか。

ただし、現存最古の完全版に当たる1568年版には、表3の通り、1557Uを基本としつつも、1557Bの異文を引き継いでいる箇所がある。この点は、1568年版の正統性を考える上で重要であろうから、別の機会により詳しく論じたい。

4. パリの海賊版の系譜

生前の版の中で現存し、かつ所在の明らかな版は1555A, 1555V, 1557U, 1557Bの4種のみである。ただし、2010年のパリの古書市では、1561年のニコラ・ビュフェ未亡人 (la veuve Nicolas Buffet) 版が出現した (購入者は不明)。その版は1560年ないし1561年にパリのバルブ・ルニョー (Barbe Regnault) が刊行した版のコピーであろうと考えられる。本稿の最後に、これらの版について扱う。

4.1 ルニョー版の書誌

バルブ・ルニョー版は現存しないが、19世紀の書誌学者ブリュネによる最古の言及は以下のようなものである。

「未刊だった300篇を含むミシェル・ノストラダムス師の予言集。パリ、バルブ・レニョーのために。1560年 (巻末に「1561年」)、十六折版。7巻分の詩百篇を収録。15～20フラン。1750年のジェルサンの競売に出品された伝本は12ソルで落札された」 (Brunet 1880 : col.36) [11]。

レニョー (Régnauld) はルニョーの誤記と見なされている。また、扉と奥付で刊行年が一致しないが、扉の「1560」を旧方式の暦法表記と推測し、1561年の刊行であろうと推測するギナールの見解が、この場合は妥当なものと思われる (Guinard 2008 : 70)。

この版は現存しないが、その内容は伝わっていると考えられている。1588年のニコラ・ロフエ未亡人 (la veuve Nicolas Roffet) の版などがそれである。

4.2 1588年以降のパリ版の特色

ロフエ未亡人版 (1588Rf) をはじめとする1589Rg,

1589Me, 1612Meなどは、「著者によって最後の詩百篇の39篇に1561年向けの改訂・追補が行われた」 (Reueues & additionnees par l'Autheur, pour l'An mil cinq cens soixante & un, de trente neuf articles à la dernière Centurie.) という、他の版に見られない特異な副題を含んでいる。これは、ルニョー版を再版した結果と見なされている。ただし、この「39篇」が何を指すのかについては定説がない。ブナズラは1557Bの第7巻が40篇だったことを踏まえ、39篇しかなかった版が先行していた可能性を示唆していた (Benazra 1990 : 122)。しかし、こうした1557Bとの関連付けは、1588Rfなどの異文がむしろ1557Uのテクストに近いことを考慮すると説得力に欠ける。

さて、1588Rfなどには一部の詩で、本来の詩と差し替える事例が見られる。たとえば、1588Rfの第1巻59番と第3巻18番は以下のとおりである。

第1巻59番

Les exiliez deportez dans les Isles,
Au changement d'vn plus cruel monarque.
Seront meurtriers, & mis deux des scintiles,
Qui de parler ne seront esté parques.

第3巻18番

Les exiliez deportez dans les Isles,
Seront meurtris, & mis deux des scintiles
Qui de parler ne seront esté parques,
Au changement d'vn plus cruel monarque.

行の順序とごく一部の単語が変わっているだけで、實質的に同じ詩である。しかし、1555Vの第3巻18番は以下の通りで、訳をつけるまでもなく全く別の詩であることは一目瞭然である。

Après la pluie laict assés longuete,
En plusieurs lieux de Reins le ciel touché
Helasquel meurtre de seng pres d'eux s'apreste.
Peres & filz rois n'oseront aprocher.

このような差し替えにより削除された詩篇は、第2巻に1篇 (62番)、第3巻に12篇 (18, 19, 33～36, 38～42, 49番)、第5巻に5篇 (16～20番)、第6巻に21篇 (27～31, 43～53, 65～69番) で39篇ある。「最後の詩百篇」 (単数) という表現には整合しないものの、この詩篇数に関わりがあると見るギナールの指摘は妥当だろう (Guinard 2008 : 71-72) [12]。

なお、1588Rfなどは第8巻までを含み、ブリュネがルニョー版を第7巻までとしていたのとは一致しないが、1588Rfの第7巻はわずか12篇、第8巻は6篇なので、ひとまとめに第7巻と誤認されても不思議ではない。

さて、それらの第7・8巻は正規の第7・8巻とまったく

ノストラダムス『予言集』初期版本に関する
文献学的諸問題の検討

一致せず、特に第8巻は内容的にもノストラダムスのスタイルと一致しないことが指摘されており、単なる偽作の可能性が高い [13]。ルニョーは、ノストラダムスの1561年向けの暦、1562年向けの占筮、1563年向けの暦を刊行していたが、いずれも偽物や海賊版なので、『予言集』もそうした偽版だったのだろう。

1588Rf, 1589Me, 1589Rg, 1612Meを校異した範囲では、1589Meと1612Meは独断的な書き換えが目立ち、先行する版との乖離が大きくなっている。逆にそうした書き換えが最も少ないのは1588Rfで、これがルニョー版に最も近いはずだと考えられる。いずれの版も、1555Aだけでなく明らかに1557Uの特色を引き継いでいるが、1557Bを参照したと考えられる積極的な異文は見当たらない。

これらの版は、序文が1557年3月1日付となっている点も特徴的である（初版は1555年3月1日）。この序文の日付の書き換えが持ちうる意味については後述したい。

4.3 1561年ビュフェ未亡人版

2010年のパリの古書市では、従来全く知られていなかった『予言集』1561年ニコラ・ビュフェ未亡人版が出品され、出品者のトマ＝シュレル書店のカタログには写真とともに書誌が掲載された (Scognamillo 2010)。副題が1588Rfなどとほぼ一致し、扉に「1561」と明記されていることから、おそらくルニョー版を複製したものと思われる。

トマ＝シュレル書店の目録は、ビュフェ未亡人版を1580年代末の偽年代版としているが、その根拠は1588Rfや1589Rgに特色が一致するから、同じ時期に出されたのだろうというだけである。だが、これは論理が逆転している。

ビュフェ未亡人は、1560年前後にはノストラダムスの偽版を出して他の業者から訴えられていたというし (Parent 1974 : 152)、同じ時期に「ノストラダムスの弟子」を名乗る模倣者の暦書を出したりもしていた (SWANN 2007 : Lot16)。こうした事実との整合性を考えれば、1561年にビュフェ未亡人が偽版『予言集』を刊行していたことを、あえて疑う理由はない。1588年以降のパリ版の特色は、ルニョー版かビュフェ未亡人版を再版した結果として理解することが可能である。

気になるのは、1588Rfなどで「39篇」となっている副題の詩篇数が、ビュフェ未亡人版では「38篇」となっている点である。もっともこれについては、数え方の違いの域を出るものではないと考えられる。実際、ギナールはビュフェ未亡人版の発見以前から、差し替えられた詩篇を実質「38篇」と指摘していた [14]。

4.4 ルニョー版の意義

ルニョー版は実在したと思われるが、1588Rfなどに見られる詩篇の差し替えや異文の多さからすれば、粗雑な偽版であることは確実で、ノストラダムス自身の手が入って

いたとは考え難い。ただし、ひとつだけ興味深い点がある。

それは、第4巻54番に、詩番号ではなくPROPHETIES DE M. Nostradamus, adioustees outre les precedentes impressions. Centurie quatre. (先行する版をこえて付け加えられた) との小見出しが付けられており、「先行する版」の「版」が複数形になっている点である。というのは、現存する範囲では、1560年以前に出されていて、なおかつ第4巻53番までしか収録されていない版は、1555年ボノム版しかないからである。反面、1557Uや1555Bにはこのような小見出しはなく、それらの版だけから、初版にどこまで収録されていたのかを判断することはできない。

前述の1557年に改変された序文の日付と、4巻途中に挿入された副題という2点から、筆者なりの仮説を述べると、次のようになる。

「1557U以前に1555A/Vを引き写した海賊版（内容ははっきりしないドニーズ版などに比定してもよい）があった。ルニョーはボノム版の存在を聞き及んでいたが、手元にあったのは海賊版の方だけだった。そこで、手元の海賊版以外にも第4巻53番までの版が存在することは知っていたため、第4巻54番に前述の小見出しを付けた。だが、手元の海賊版で序文が省かれていたため、ルニョーはその海賊版と1557Uを基にして予言集を再編した際に、序文は1557Uから引き写した。その結果、1557Uを序文の初出と思いついたルニョーが、序文の年を『1557』と改竄した」。

ルニョー系の版は誤植が多いので、その表記を基に上のような推測を行うのは、相当に不確実な要素が伴うのは言を俟たない。そのため、先行する版が複数形になっていることも、どこまで信頼できるのかは定かではない。ただ、現存する版に限られている中で、失われた版の痕跡を見出しうる根拠として、いずれ別の機会に、より深く論じる価値はあるように思われる。

5. 1558年版の実在性

以上見てきた生前の版の中では、いずれも第7巻まで、もしくは非正規の第8巻までしか含む版しか出てこなかった。では第8巻から第10巻はいつ登場したのだろうか。

現存最古の第10巻までを含む版は、1568年ブノワ・リゴー (Benoist Rigaud) 版である。しかし、それはノストラダムスの死後2年目であって、生前の刊行ではない。

他方で1558年に刊行されていたという説もあり、実際、17世紀半ば以降には、1558年リヨン版もしくは1558年アヴィニオン版に依拠したと主張する版がルーアン、ライデン、アムステルダムなどで複数登場した。

過去の論者の中には、そうした版の方が1568年版に比べて、第8巻以降の本来の原文が保存されていると見なす者たちもいた。『予言集』の全体像を捉えるにあたり、第8巻以降の内容を論ずる際には、どの版を基本とすべきかなどを検討することが必要であろう。この点は、機会を改めて論じたい。

6. おわりに

『予言集』の初版である1555年版は1980年代に再発見されて以降、研究が進められてきたが、本稿では1555Aと1555Vの2系統で捉えられてきた従来の見方では不十分である可能性を明らかにした。

1557年版については1557Uの方が先行していると思われるべきことを、具体的な異文の検討も行なって確認した。また、1557Bは海賊版とみておくことが妥当であろうが、現存最古の完全版である1568年版に引き継がれている異文も含まれることを指摘した。

1561年頃に出版されたパリの版は、1588年以降の再版からすると明らかな海賊版だが、現存しない版についての痕跡をいくらか見出せる可能性を確認した。

今回検討したいずれの版であっても、正篇の第8巻以降は含まれていない。第8巻以降を検討する上で重要なのは、1558年版が実在したのかどうかである。次の研究は、その点を深めてゆくことになるだろう。

7. 付表

今回参照した古版本、及びフォトコピー等を参照可能で今後の研究に使用することになる古版本の略号を以下に掲げる。略号には先行研究と一致するものがある一方、あえてそれと異なる略号をつけたものがある。なお、略号の数字は刊行年を基準としたが、刊行年が記載されていない版や偽年代版には、近いと思われる年数をあてた。あくまでも暫定的なものであり、その年に刊行されたと断定するものではなく、今後の研究次第では、略号の数字と推測される刊行年との間にずれが生じる場合もありうる。

《》をつけた情報は、偽版やその可能性のある版に記載された情報である。また、所蔵先は、区別する必要がある場合のみ図書館の所在都市名などを掲げた。

付表 校異に用いる古版本の一覧表

略号	刊行地	刊行者（所蔵先）	刊行年
1555A	Lyon	Macé Bonhomme (Albi)	1555
1555V	Lyon	Macé Bonhomme (Vienne/Wien)	1555
1557U	Lyon	Antoine du Rosne	1557.9
1557B	《Lyon》	《Antoine du Rosne》	1557.11
1568A	Lyon	Benoist Rigaud (Lyon)	1568
1568B	Lyon	Benoist Rigaud (Schaffhausen)	1568
1568C	Lyon	Benoist Rigaud (Aix, Arbaud S.389)	1568

1568X	Lyon	Benoist Rigaud (Stockholm)	1568
1568Y	Lyon	Benoist Rigaud (Aix, Arbaud S.391)	s.d.
1588Rf	Paris	La veuve N. Roffet	1588
1589Rg	Paris	Charles Roger	1589
1589Me	Paris	Pierre Ménier	1589
1589PV	Rouen	Raphaël du Petit Val	1589
1590SJ	Anvers	François de St.-Jaure	1590
1590Ro	Cahors	Jacques Rousseau	1590
1597Br	Lyon	Les héritiers de Benoist Rigaud	s.d.
1603Mo	Paris	Sylvestre Moreau	1603
1605sn	s.l.	s.n.	1605
1606PR	Lyon	Par Pierre Rigaud	s.d.
1607PR	Lyon	Chez Pierre Rigaud	s.d.
1610Po	Lyon	Jean Poyet	s.d.
1610Di	Lyon	Jean Didier / J. Poyet	s.d.
1611A	Troyes	Pierre Chevillot	1611
1611B	Troyes	〃	s.d.
1612Me	Paris	Pierre Ménier	s.d.
1627Ma	Lyon	Pierre Marniolles / Estienne Tantillon	s.d.
1627Di	Lyon	Jean Didier	1627
1628dR	Troyes	Pierre du Ruau	s.d.
1644Hu	Lyon	Jean Huguetan / Claude de la Riviere	1644
1648Hu	Lyon	〃	s.d.
1649Ca	Rouen	Jacques Cailloué, Jean Viret, J. Besongne	1649
1649Xa	《Lyon》	s.n.	《1568》
1650Le	Leyde	Pierre Leffen	1650
1650Ri	Lyon	Pierre Rigaud	s.d.
1650Mo	Paris	Sylvestre Moreau	1650
1653AB	Lyon	P. André / A. Baudrand	s.d.
1665Ba	Lyon	s.n. / Jean Balam	1665

ノストラダムス『予言集』初期版本に関する
文献学的諸問題の検討

1667Wi	Amsterdam	Daniel Winkeermans	1667
1668Am	Amsterdam	J. Jansson & la vefue de feu E. Weyerstraet	1668
1668JR	Paris	Jean Ribou	1668
1669Pr	Paris	Pierre Promé	1669
1672Ga	London	Thomas Ratcliffe & Nathaniel Thompson	1672
1689Ou	s.l.	Jean Oursel	s.d.
1689Vo	Cologne	Jean Volcker	1689
1689Be	Rouen	Jean-B. Besongne	1689
1689Ab	Bordeaux	Pierre Abegou	1689
1689Ma	Bordeaux	Jean Martel	1689
1691ABa	Lyon	Antoine Besson	s.d.
1691ABb	Lyon	〃	1691
1691Be	Rouen	Jean-B. Besongne	1691
1697Vi	Lyon	Jean Viret	1697
1698Ly	Lyon	s.n.	1698
1710Be	Rouen	Jean-B. Besongne	1710
1716PRa	« Lyon »	« Pierre Rigaud » (Paris, BnF)	« 1566 »
1716PRb	« Lyon »	« Pierre Rigaud » (Rome)	« 1566 »
1716PRc	« Lyon »	« Pierre Rigaud » (Munich)	« 1566 »
1720To	Turin	Reycends & Guibert / Jean Radix	1720
1772Ri	« Lyon »	« Benoist Rigaud »	« 1568 »
1780MN	Paris	Marchands de Nouveautés	s.d.
1791Ga	Avignon	Jacques Garrigan	1791
1792Du	Anvers	Peter Wan Duren	1792
1792La	Riom / Clermont	Landriot / Beauvert & Rousset	1792
1793Bo	Avignon	Les frères Bonnet	1793
1794Bo	Avignon	Les frères Bonnet	1794
1800Sa	« Salon »	« L' Imprimeur de Nostradamus »	s.d.

1840EB	Paris	Maillet	1840
1867LP	Paris	Anatole Le Pelletier	1867
1981EB	s.l.	s.n.(cf. Bellecour1981)	« 1605 »

注釈

- [1] 『至妙の製法集』は通常、『化粧品とジャム論』(*Le traité des fardements et des confitures*)という通称で呼ばれることが多いが、ここでは1555年版の長い正式名から抜粋した*Exquises Receptes*を略称として用いているミレイユ・ユションに倣い、その略称に仮訳をあてた。
- [2] 田窪勇人がかつてウェブサイトで指摘していた符合だが、2022年現在、その論考は見られなくなっているようである。<https://sites.google.com/site/nrn1996/>
- [3] 印刷上のずれなども含めると45篇77箇所になる(Benzra 1984 : 14-16)。ただし、表1の第1巻92番や第2巻45番の例(Nostradamus 1996では異文として指摘されている)などは見落とされており、実際にはもう少し多いと考えられる。
- [4] 前述の中間的な版の可能性も踏まえるなら、1589PVで参照されていたのは、そうした版だった可能性もある。
- [5] 1627Maは17世紀の偽作である第7巻43番と44番が追加された最初の版であろうと思われるが、ほぼ同内容の1627Diとどちらが先に刊行されたのかについては、研究の蓄積が少ないせいもあり、広く合意されているとは言い難い。ここでは1627Maを先と見なしたが、本題から逸れるので詳述は避ける。
- [6] ドニーズ版とは別に、1555年と1556年にアヴィニオンで刊行されていたという説もある(Chomarat 1989 ; Benzra 1990)。
- [7] 1557Uは7×12cm、1557Bは6.1×9.3cmという(前者はGuinard 2008、後者はKlinckowstroem 1913による)。
- [8] シャルルは1556年生まれだが正確な月日は特定されていない。マドレーヌに至っては1551年頃と推測されるにとどまる(Leroy 1972)。「大体」というのはそういうことである。なお、三男アンドレは1557年生まれだが、誕生日は11月3日なので考慮しなかった。
- [9] 実際、ルヴェールは1557Uの発見前の時点で、1557Bは小さな版型に詰め込むような印刷になっていることから、未発見の版の入りきらなかった詩篇を割愛した可能性を指摘していた(LeVert 1979 : 255)。
- [10] 画像の出典はウィキメディア・コモンズ(<https://commons.wikimedia.org/>)による。ファイル名は上の画像がFile:Nostradamus1555.jpgで、下の画像がFile:Nostradamus1557.jpgである。
- [11] 16世紀の出版物の奥付等では「ために」pourは書籍商

を、「による」parは印刷業者を指すという（宮下 2007 :4）。

- [12] ギナールは、ほかの個所ではより暗号解読的な色合いの強い読みの可能性を披露しているが、そちらは深読みのし過ぎであろうと思われる。
- [13] 第7巻のうち1篇は詩百篇からの再利用、残る11篇は『1561年向けの暦』の予兆詩を転用したことが知られている（Chevignard 1999 : 144, 148-149）。
- [14] 他の詩篇による差し替え対象となった詩篇は『予言集』に収録されていないが、例外は第6巻30番と31番の2篇で、これらは本来の位置にはないものの、第6巻27番と28番の差し替えに利用されているために、詩篇そのものは削除されてない。また、第7巻72番も本来の第6巻31番の使い回しなので（本来の第7巻正篇に72番など存在しないが、72番に収録されるべき詩が差し替えによって削除されたものと見なせば）削除された詩篇は $39-2+1=38$ で確かに38篇になる。

文献

- Eugène BARESTÉ, *Nostradamus*, Paris ; Maillet, 1840.
- Elisabeth BELLECOUR, *Nostradamus trahi, suivi du texte original et complet des dix Centuries, édition de 1605*, Paris ; Éditions Robert Laffont, 1981
- Robert BÉNAZRA, « Préface », *Les Prophéties (Lyon, 1555)*, Lyon ; Les Amis de Michel Nostradamus, 1984, pp.5-27
- Robert BÉNAZRA, *Répertoire chronologique nostradamique (1545-1989)*, Paris ; Guy Trédaniel, 1990
- Pierre BRIND'AMOUR, *Nostradamus Astrophile*, Paris ; Éditions Klincksieck / Ottawa ; Les Presses de l'Université d'Ottawa, 1993
- Jacques-Charles BRUNET, *Manuel du libraire et de l'amateur de livres*, supplément, T. II, Paris ; Librairie Firmin-Didot et C^{ie}, 1880
- Anna CARLSTEDT, *La Poésie oraculaire de Nostradamus : langue, style et genre des Centuries*, Stockholms universitet, 2005
- Bernard CHEVIGNARD, *Présages de Nostradamus. Présages en vers 1555-1567, présages en prose 1550-1559*, Paris ; Éditions du Seuil, 1999
- Michel CHOMARAT, *Bibliographie Nostradamus XVI^e-XVII^e-XVIII^e siècles*, Baden-Baden ; Verlag Valentin Koerner GmbH, 1989
- Frédéric GODEFROY, *Dictionnaire de l'ancienne langue française et de tous ses dialectes du IX^e au XV^e siècle*, 10 Tomes, F. Vieweg (T.1-5)/ E. Bouillon (T.6-10), 1880-1902
- Patrice GUINARD, « Historique des éditions des *Prophéties* de Nostradamus (1555-1615) », *Revue française d'histoire du livre*, n° 129, 2008, pp.9-142
- Patrice GUINARD, « Les premières éditions des *Prophéties* 1555-1563 », 2006/2020 <http://cura.free.fr/dico2pro/606B-pro.html> (2022年9月6日閲覧)
- Mireille HUCHON, *Nostradamus*, Paris ; Éditions Gallimard, 2021
- Edmond HUGUET, *Dictionnaire de la langue française du seizième siècle*, 7 Tomes, Librairie Ancienne Édouard Champion(T.1)/ Librairie Ancienne Honoré Champion (T.2-3)/Librairie M. Didier (T.4-7), 1928-1967
- Carl von KLINCKOWSTROEM, "Die ältesten Ausgaben der ‚Prophéties‘ des Nostradamus", *Zeitschrift für Bücherfreunde*, Mars 1913, pp. 361-372
- Edgar LEROY, *Nostradamus : ses origines, sa vie, son œuvre*, Bergerac ; Imprimerie Trillaud, 1972
- Liberté E. LEVERT, *The Prophecies and Enigmas of Nostradamus*, Glen Rock, N.J. ; Firebell Books, 1979
- Gérard MORISSE, « Nostradamus, cet humaniste », *Les Prophéties de M. Michel Nostradamus*, Budapest ; Országos Széchényi Könyvtár, 2004
- Jean-Dominique MELLOTT, Elisabeth QUEVAL, Nathalie AGUIRRE, Cécile BELLON, Wojciech KOLECKI et Antoine MONAQUE, *Répertoire d'imprimeurs/libraires (vers 1470 - vers 1830)*, Paris ; Bibliothèque Nationale de France (BnF), 2019.
- NOSTRADAMUS, *Les Premières Centuries ou PROPHÉTIES (édition Macé Bonhomme de 1555). Edition et commentaire de l'Épître à César et des 353 premiers quatrains par Pierre Brind'Amour*, Genève ; Droz, 1996
- Annie PARENT, *Les métiers du livre à Paris au XVI^e siècle (1535-1560)*, Droz, 1974
- Roger PRÉVOST, *Nostradamus le mythe et la réalité*, Éditions Robert Laffont, 1999
- Daniel RUZO, *Le testament de Nostradamus*, Montréal : Presses de la Cité, 1982
- Michel SCOGNAMILLO, *Nostradamus en son siècle*, Paris ; Librairie Thomas-Scheler, 2010
- Nostradamus. Early Printed Books. (April 23 2007)*, New York ; SWANN Galleries, 2007
- ピエール・ブランダムール校訂, 高田勇・伊藤進 編訳 『ノストラダムス予言集』岩波書店, 1999年
- 宮下志朗『ラブレール周遊記』東京大学出版会, 1997年
- 宮下志朗「16世紀出版文化の中のノストラダムス」(樺山紘一・高田勇・村上陽一郎 編『ノストラダムスとルネサンス』岩波書店, 2000年, pp.119-147)
- 宮下志朗「ルネサンスの『特認』と海賊版」(『図書』2007年6月号, pp.2-5)